
Outsiders

Reisin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

O u t s i d e r s

【Nコード】

N 1 5 4 0 I

【作者名】

R e i s i n

【あらすじ】

人間であつた者達。

しかし彼らは現在、人間ではなくなっていた。
人の姿をし、人の言葉を話し、人として振る舞う彼ら。
だが致命的に人間ではない彼ら。

——アウトサイダー。

偶然か必然か。

彼らと遭遇してしまった哀れな『人間』の少年。
その目を通して見る、人外達の物語。

ブローグ

人間。

それを定義するのは非常に難しい。

生物学的に人と断定するのは容易いが、非物質的に、精神的に断定するのは、驚くほどに困難なのである。

不可能、と。

俯瞰的に見ればそう言ってしまうのかも知れない。

しかし現実には、人は人を区別し、それ以外を切り離して考えている。考えることに成功している。

では、どうやって？

やはり最初は、外見から判断する。

人の形。

それはもちろん、完全に同じ形を持つものは存在しないため、大まかに判断される。

頭があり、首があり、胴体があり、手足がある。

それが一つめだ。

だが無論、それでは人形と人間の区別がつかない。

故に次はその動きを見る。

表情や声。手足の使い方。

それらを一瞬にして無意識下で観察する。

驚くべきことに。

あるいは当たり前のごとく、人はここまで確認出てきた時点で、対象を人間と見なすことが多い。

町中で通り過ぎる程度なら、人はこの程度で相手が人間であるとは思わないにせよ、人間ではないとは思わない。

勘の良いものは違和感を感じ、咄嗟に振り返るかも知れないが、そう。

人間ではないとは思わない。

この言葉に全てが集約されていると言っても良い。

人は人の形をしたものを見たとき、人間と肯定できる物証を探すのではなく、相手を人間ではないと否定する根拠を探すのだ。

例えば。

手足がないのなら、人は相手を人間でないとは思わない。

しかし頭がなければ、どうだ。

それが動いていれば、人は相手を人間とは見なさないだろう。機械か、あるいは中に人間が入っているのか、いずれにせよ相手そのものを人間とは判じない。

人間として肯定するのは困難である。

だが。

人間ではないと否定することは容易い。

そう誤解している。

本来なら肯定するのと同様に否定するのも困難であるのにも関わらず、自分が今までの人生で得られた『人』という存在に対するイメージを、目の前のそれと照らし合わせ、致命的な差異が見つからない限り、相手を『人』として認識する。

経験とイメージ。

当然、それは個人差があり、人類に共通のものではない。

しかし人は群れの中で生きる生物である。

大多数がそれを肯定すれば、自分が当初それを否定していたとしても、いつしか肯定してしまふ。

それは数だけではない。

法則や真理と呼ばれるもの。

科学的に正しい。専門家がこう言っているのだから真実なんだと、そう言われれば納得する。

自分自身は一切の検証をせずに。

それを肯定する。

それを否定する。

人間社会を円滑に回す上で、それは素晴らしい潤滑油となる。

正しいのだ、人にとってそれは。
なくてはならないことなのだ。

規律と呼べるものが本来存在しないはずの世界において、人のような大規模な社会を維持していこうと思ったら、それは必須のものである。

だから、そう。

人が手に入れた本能と言っても良い。
だが時々。

人にとっての必須なはずのその社会本能は、致命的な問題を引き起こす。

クローンやアンドロイド。

人間というものを考えなければならぬ命題に直面したとき、社会秩序の一部は瓦解する。

人とは何か。

答えのない疑問。

考えてはいけない疑問。

しかしそれに直面したとき、人は一定の解を得ずには進むことが出来なくなる。

例えば、そう。

人間ではない彼らに遭遇した僕のように。

生物学的に人間と判じられ、人間から見ても何の違和感もない、しかしどうしようもなく人間ではない彼ら。

人という枠を越えて、線の外側で蠢く彼ら。
はみだした者達。

——アウトサイダーと遭遇した僕のように。

第一話

轟音に顔を上げる。

窓の向こう、青い空の中を飛ぶ黒い影が一つ。

「お、ヘリコプターだ」

直樹が窓から身を乗り出しその行方を追う。危ないと注意しようとしたが、絵美が腕を振り下ろす方が早かった。

「こら、食事中。座って行儀良くしろ。解ったか？」

「おう……すまねえ」

はたく、と言うには些か鈍すぎる音。

どうやら直樹の頭に当たる寸前、絵美の手は握りしめられていたらしい。

何というか、まあ。

心の底から行儀良くしようと思う。

「きっかけ、珍しいよな。ヘリなんてさ」

後頭部をさすりながら、直樹は僕の正面に腰を下ろした。その瞳は好奇心に輝いている。だが一方で、その隣の机に戻る絵美はあきれ顔。馬鹿な子供を見るような目で直樹を見た。

「どうせ大した事じゃないわよ、きつと。事故の撮影がせいぜいね」

「うわ、夢がないなあ、お前。胸はほどよく詰まってるく——ガッ」

「その空っぽの頭に校庭の砂でも詰め込んで上げようね、直樹」

「待て。待つんだ絵美……俺はただ、褒め言葉を口にただけだぞ？」

「おっさん趣味よ、それ。いきなり公衆の面前で胸を褒められても殴って燃やして埋めなくなるだろうが」

ぐい、と直樹のこめかみを締め付ける絵美の手に力が込められる。拳を握って耐える直樹。

そう言えば、こいつは以前に俺に諭したな。

『いいか、司。男の子が泣いて良いのはな、娘の結婚式と孫が生まれた時だけなんだぜ?』

娘が生まれた時は泣かないんだと、そう思ってしまったが、その時の直樹の顔があまりにも凜々しかったので口をつぐんだのだ。ん、凜々しい直樹……?

ああ、違った。

僕はその時、夕日に見とれていたただだったんだ。

「あ、落ちちゃった」

どさりと重い音を立てて、直樹の頭が机の上に転がった。

その顔は微かに笑っている。

直樹が時々浮かべるそれは、やり遂げた男の顔というやつらしかった。

そうだね。

僕は女性のスタイルを安易に褒める事はこの先ないよ、直樹。

他山の石とする。

「さ、食事の続きしよう」

「そうだね、うん……そうだね」

にこりと可愛らしく微笑み姿に、こくこくと頷く。

何だろう。ひどく喉が渇くよ、直樹……。

「うん? 空なんか見てどうしたの? また何か飛んでる?」

「いや、何でもないよ。ちょっと目が疲れただけだから」

「そう? ……でもやっぱりそれ、良くないんじゃない?」

「え? ああ、そうだね……やっぱり助けた方が良かったよね」

「そうじゃなくて」

僕の机をびしっと指さした。

「お弁当よ、お弁当。毎日コンビニでしょ? 経済的にも栄養的にも良くないってば」

「あー、大丈夫。今のところ問題ないから」

自信に満ちた顔を浮かべる。

が、根拠のないそれを見過ごすほど柏木絵美は甘い人間ではなか

った。

右手の中指で机をトントンと叩き始める。

肘をつき、その先の拳に頬を乗つけた彼女は、斜めにこちらを見上げてきた。

「あんさん、それで言い逃れ出来ると本当に思うとんのか？ それやったら、こつちもそいう対応せなあかんがなあ」

「……あー、弁護士を呼んでください」

「裁判長異議あり！ 検察のそれは恐喝に違いありません！」

「いきなり法廷かつ！」

いつの間にか息を吹き返した直樹が、しかし再び意識を刈り取られた。

無論、絵美のツツコミ——もとい、手刀である。

残像すら見えなかった。

彼女が本気になれば、きっと世界を取れるに違いない。

「はあ……でもさ、本当にね？ 良くないわよ」

眉根を寄せて言ってくる。

敵わないと思い、仕方なく本音で話すことにした。

「どう足掻いても美味しく作れなかったんだよ」

自分の事を器用だとは思った事はない、それほど不器用だとも思っていないかった。しかし、料理に関して言えば、自分はどうかやらず器用どころの話ではないらしいことが解ってしまった。

何というか、味覚に対するイメージが湧かないのだ。

「味付けのセンスの問題？」

「うん、そんな感じ。これで良い！ ってのがないんだよね。霞を作って霞を食べてるような気分なんだよな」

「変なやつだな、お前。観察力は並外れてる癖にな」

二度目の復活を果たした直樹が、笑いながらそう言った。

肩をすくめて返す。

「観察力が高いんじゃないやなくて、色の変化が解りやすいだけだよ」

「そうかなあ？ まあ、いいや。その手の問題は、彼女でもつくっ

て、家に飯を作りに来てもらえば解決する。お前の場合は一人暮らしなんだし、やりたい放題だろ？」

「うわ、最低。その発想ないわ」

「馬鹿言うなよ。男のロマンの一つなんだよ、こいつは。な、司？」
「どうだろうね……」

家に誰かが来て、食事を作って帰って行く。
対価は愛情だろうか。

解らないが、いつも自分しかない空間に、誰かが入ってくるのは少し疲れそうだ。

「第一、まず彼女が出来ないと思うよ。僕には」

「ああ？ そんな事ないって。な、絵美」

「そうねえ。一友人として言わせてもらえば、本人次第ってところかな」

「ほう？ その心は？」

「恋愛は付加価値じゃなく、その意志が全てを決定する。そう言う事よ。司は彼女欲しいの？」

「どうだろ。あんまり興味ないなあ」

「お前はパーソナルスペース広いもんな」

「欲しくなったら出来るんじゃない？ 私は割と良いと思うし」

「お、それは一女としての意見かな？」

「一女として言わせてもらうなら、あんたはもう少し落ち着きを持ちなさい。年上にしか受けないわよ、ガキっぼいの」

「年上か……へへ、悪くねえかもな……」

光明を見つけたアスリートのように、不適な顔で笑う直樹。僕は苦笑を浮かべ、絵美はあきれ顔になった。

直樹が馬鹿な事を言い、絵美がそれをぶった切る。そこに僕が時折言葉を挟みながら、昼休みを過ごしていく。

僕が何かを欲しないのは、きつと満たされているからだろつ。

少なくとも友人には恵まれている事は事実だ。
そう思った。

第二話

結局、雨は降らなかった。

朝の天気予報では午後からの降水確率は七十パーセントだったのだが。まあ、当てる方が難しいんだから仕方ないか。

道ばたに放置したくなる傘を憂鬱に持ち上げ、夕焼けに染まる空の下を歩き始めた。

特に何も考えたりはしない。

ただ歩く。

頭を使うのは苦手なのだ。

もしくは、面倒くさいとか疲れるとか言っただ方が良いか。

頑張っただけを考えてみるが、すぐに自分が同じところをぐるぐると回っているだけのような気に襲われる。きっと自分は人よりも頭が良くないのだ。

だから見るだけ。

色や形。

その影や光を目で見つめるだけ。

だからいつもぼうつとしてる。

もちろん今もそうだ。

空とか雲とか、歩いている人とか見ている。

でも、目で追ったりはしない。

視界から外れればそれまで。

関心もない。

心残りもない。

何の感想も抱かず、ただ目の前にあるものだけを見つめている。だから僕は歩いているだけなんだろう。

前だけを向いて進んでいるだけなんだろう。多分。

それが今の僕であり、今までの僕であり。

そしてきつとこれからの僕であるのだろう。
そう思う。

駅の前を通り過ぎながら。
スーパーの駐車場を通り抜けながら。
歩いていく。歩いていく。歩いていく。

不意に。

変なものが見えた。
者、かも知れない。
だがいまいち良く解らない。
何だろう、あれは。
人に見える。

小学校低学年くらいの、小さな男の子に見える。
住宅地の道路に佇む子供。
ごく普通。

ああ、もちろん。

彼の周囲で倒れている血まみれの人々を除けば、だが。

はて。

自分が動揺していないのは、混乱しすぎて逆に冷静になっている
からだろうか。

いや、きつと違うな。
違和感を感じているからだ。
何だろうか。

彼は人に見えるが、人ではないようにも見える。
我ながら矛盾した所見。
だがそうとしか言えないのもまた事実。

少年が顔を上げる。

幼い顔立ち。

表情は憎悪。

大きな黒い二つの目は、爬虫類を思わせる光を放っていた。それが僕を射貫き、きゅっと細められる。

瞬間、異音を耳にする。

すぐ近く。

と言うよりも、頭のすぐ下から。

何の音だろうと見下ろせば、胸から腕が生えていた。

小さな細い腕。

手の中に握りしめられているのは、脈打つピンク色の肉塊。

心臓だった。

まさかひよつとしてこれは、僕のものだろうか。

そんな馬鹿げた問いを抱く。

ふと顔を上げれば、少年がこちらに腕を伸ばしていた。

いや。

腕は見えない。

半袖のＴシャツを来た彼の右腕は、肘の先からすっぽりと消えてなくなっていた。

断面に見えるのは筋繊維と骨。

血が出ていないそれは、人体模型のようにも見える。だが模型と違うのは、その筋繊維が時折収縮しているところだった。

もう一度、自分の胸元を見下ろす。

そこに生えているのは、手の形から右腕だと解った。

思い浮かべたのはマジックショー。

細長い箱の側面に手を入れると、反対側から飛び出すといったあれ。

まあ無論、僕と少年の間には空気くらいしかなく、種を仕込む場所などなかったのだが。

しかしこの心臓。

状況から考えれば、やっぱり僕のものなのだろうか。

だとしたら元に戻して欲しいのだけど。

でも、そうだな。

僕のじゃないかも知れない。

まだ僕は疑うことなく生きているし、痛みも感じなければ胸から血が噴き出しているわけでもない。それどころか誰のか解らないあの心臓、まだどくどくと動いている。

と、心臓がぐにやりと歪む。

それを握る腕が力を込めたのだ。

心臓を押しつぶそうと、ぐいぐいと小さな手で頑張っている。

ぶちり、と。

頑張りの成果が出たらしく、心臓は潰れ、鼓動を打つのを止めてしまった。

仕事をやり遂げたからか、僕の胸から生えていたその腕は、幻のように一瞬で消えてしまった。

僕の胸は異常なし。

穴が開いているわけでも、血がついているわけでもなかった。痛みも苦しみもない。いつも通りの身体だった。

足音に顔を上げる。

少年がこちらに背を向け、どこかへと歩き去っていくところだった。その後ろ姿には、確かに右腕が存在した。

何か言葉をかけようと思ったが、結局は口を閉ざした。

訳がわからなさすぎて、どうして良いか解らなかったのだ。

やはり僕の頭は良くないらしい。

そっ息を吐いた、その瞬間だった。

——ぶちり。

ぐらりと身体が傾き、道路に倒れ込んだ。

「うっほっ——」

口から大量の赤い血が飛び出した。

それが目の前の道路にゆっくりと広がっていくのを、奇妙な思いで見つめた。

ああ、やっぱり。

……あれは僕の心臓だったのか。

そして僕は。

考えることも見ることも出来なくなった。

第三話

白い壁が見える。

ん…… ああ、壁じゃない。あれは天井だ。

首を動かすと、細長いパイプのようなものと、その先につるされた透明のパックが見えた。

「点滴……？」

パックから伸びるチューブを辿れば、自分の左腕につながっていた。それを確認したところで、どうやらここが病室らしいことに気づく。

当然疑問を抱く。

なぜ病院なんかには僕はいるのか、だ。

自分で来た覚えはないし、持病もなければ具合が悪かった記憶もない。突発的に倒れ、病院に運ばれたのであれば、その処置が点滴というのはおかしくはないか。

手足の指を動かしてみるのが問題はない。

どこかが痛いとか、苦しいとかいうこともない。自分では悪いところの一つも見つからなかった。

取りあえず上半身を起こす。

自分の身体を見下ろしてみte気づいたが、どうやら僕は制服を着ているらしい。当然切り裂かれているわけでもなく、ごく普通の状態である。これではまるで、学校の帰りにちよつと病院によって「看護師さん、点滴を一つ！」とでも言ったような状況だ。

違うか。

もっとまじな推測は出来ないのか、僕は。

何が悲しくて仕事帰りのサラリーマン風点滴ジャンキーにならねばならんだ。第一僕は病院は好きじゃない。好きな人などいるのだろうか。

ああ。

直樹はナースが好きだったな……。

「――あ、起きましたか？」

声に振り返れば、病室の扉から女性の看護師が一人入ってきているところだった。

咄嗟に答える。

「はい。そのようです」

「ん？ 変な言い回しですね、それ」

点滴のチェックをしながら笑う。

首を傾げて返す。

「起きてる人間に、起きてるかどうかを尋ねるのもどうでしょう」

「ああ、それもそうですね。それで、具合はどうですか？」

「悪くないです。あのそれより」

「どうして病院にいるか、ですね？」

「え、ええ。そうですね。どうしてですか？」

手渡された体温計を脇に挟みながら、そう尋ねた。

看護師は血圧計の準備をしながら答える。

「道で倒れていたあなたを見つけた人が、救急車を呼んだんですよ」

「……倒れていた？ 道で？」

「そうです。病院で検査してみたら、別段どこにも異常はなく、軽い貧血と疲労であると解ったので、こうして点滴をしていたわけです」

「貧血と疲労……」

変な話だ。

僕の身体は頑丈と呼ぶには華奢だが、貧血になったことはない。立ちくらみも未経験だ。そりゃあ、栄養バランスがしっかり考えられた素晴らしい食事を摂っているかと聞かれれば否と答えるしかないが、ちゃんとものを食べている以上血液は作られる。今日もきちり三食食べ……って、今何時だ？

左腕を見るがそこに腕時計はなかった。

おおかた点滴に邪魔だったから外したのだろう。

「あの、すみません。今何時ですか？」

「ええっと、午後七時過ぎですね。ああ、腕時計はこちらです」

「あ、ありがとうございます」

受け取ったそれを見れば、確かに七時過ぎだった。文字盤の日付と曜日をついでに確認すれば、いつも通り学校のある日だった。道で倒れていたのであれば、僕は登校だか下校だかをしていた事になる。朝倒れてから十八時間近く放置されていた事はないだろうから、下校時に倒れたはずだ。

と、そこまで考えて、自分の記憶がひどく曖昧なのに気づく。

病室で目を覚ます以前の記憶がないのだ。

遠い昔の事なら思い出せるが、昨日とか一週間前とかの事が良く解らない。

睡眠以外で意識が飛んだせいとか、記憶に致命的な断絶があるらしかった。

まあ、そのうち元に戻るだろう。

「はい。血圧も体温も異常なしですね。点滴ももう終わりますが…

…どうします？ 帰宅されても良いですし、一晚病院で様子を見て
も良いですが」

「帰宅します」

「解りました。では病室を出られて右に真っ直ぐ、受付の方に行ってください。こちらが荷物です。鞆ですが、他に何かありませんか？」

「いえ。これだけです。ああ……一つ聞きたいんですが、救急車を呼んでくれた方の名前や連絡先は解りますか？ お礼が言いたいの
ですが」

「いいえ。救急車にはのられなかったみたいですので」

「そうですか……ありがとうございます。失礼します」

頭を下げて扉へと向かった。

家に帰り着いた頃には時計は八時を回っていた。

県立病院に運ばれたらしく、家からかなり離れていたのだ。歩いて帰れる距離ではなく、財布を開ければ何とかタクシーが使えたので、少々落ち込みながら運転手に行き先を告げた。

しばらくは散財が出来ないと、お札の消えた財布を覗いて嘆く。念のための検査があるので、明日も学校が終わったらもう一度病院に行かなければならないし、全く憂鬱な事この上ない。

記憶の断絶よりもお金の減少の方が、よほど大きな問題だった。

ため息を何度も吐きながら食事を終え、風呂へと向かう。

脱衣所で服を脱ぎながらふと鏡を見れば、

見知らぬ男がこちらを見返していた。

誰だ。

いや、これはきつと僕だ。

顔は毎朝歯を磨く度に見てきたものに間違いないし、身長も体つきも同じ。奇妙なところはどこにも見あたらない。

だが。

強い違和感がある。

鏡に映るその左右対称の男は、確かに僕であるのだけでも、記憶と無意識に刻み込まれた自画像とは致命的に異なっている。

見かけは同じ。

中身も同じ。

だが、これは違う。

僕が見てきた僕ではない。

どこだ。

どこが違うのだ。

震える手を鏡に伸ばす。

そこに映った自分の姿を指でゆっくりとなぞっていく。

肩。首。耳。口。鼻。目。

――
胸。

指が、止まる。

ここだ。

ここがおかしい。

見た目は変わらないが、これは……この奥で動いている心臓は僕じゃない。

全く違う。

ほとんど同じだが、ほとんど違う。

良いか悪いかの話ではない。

これは間違いなく、僕が認識してきた僕の一部ではない。異物。

それが胸の中に埋め込まれている。

ひどく気味が悪かった。

「――この心臓。一体誰のなんだ……？」

鏡の中のそいつがそう尋ねた。

第四話

朝九時過ぎ、私服に着替えた後家を出た。

学校には病欠の連絡を入れた。もちろん具合が悪いことなどない。だが昨日、路上で倒れて病院に運ばれたのだから、完全に嘘と呼べる程ではないのかも知れない。別にずる休みだとばれようが、ばれなかりうが、今は学校に行つて授業を受ける気分ではない。

一刻も早く知らなければならなかった。

昨日、自分に何があつたのか。

自分はどうなつてしまつたのか。

問いに対する明確な答えが必要だつた。例え納得できるものでも、理解できるものでもなかったとしても、ある種の心の整理的なものが必要だつたのだ。

別に精神のバランスが崩れているわけではない。

僕は大概のことに無関心なのだ。他人にもそれほど興味を持てないし、自分にも同じこと。直樹や絵美のような友人達の存在を有り難いと思うが、なければ困ると思う事はない。だからこそ、僕は孤立してきたし、これからも孤立していくのだらうと思う。あの二人が例外なだけだ。僕の人間に対する価値観を告げられてもなお、彼らはそれで構わないと言つたのだから。

今ではそう、あの二人は少し特別である。

いなくなつても困らないが、寂しいと思う。

相変わらず、自分自身については何の興味も抱けないのだが。

珍しく考え事をしていたせいか、危うく目的地を通り過ぎるところだつた。

住宅地の入り口である。

昨日あれから、自分の倒れた場所について考えてみたのだ。僕は下校時に寄り道をするタイプではないし、するにしても食料品の買い出し程度だ。それも大抵は土日の間にやっているから、平日には

ほとんどしない。買い物袋もレシートも持っていなかったの、おそらく僕は学校から真っ直ぐ家に帰ったはずだった。

道で倒れていたあなたを見つけた人が救急車を呼んだ、と。

昨日看護師はそう話していた。

倒れたあなたではなく、倒れていたあなたである。ただの言い違いの可能性もあるが、その言葉から考えるなら、僕は倒れた後、一定の時間をおいて発見されたことになる。となれば人通りが多い場所とは除外できる。

学校の近辺。

駅の前。

スーパー周辺。

車通りの多い道路。

その辺りはまずないと考えて良い。となれば住宅地くらいしかあり得ないことになる。

出勤時間帯を過ぎた今。

人通りはない。

住宅地というのは間違いなく人がいるはずなのに、こういう事がよく起きる。それはそこにいる人々が動き回ることを目的としていないためだ。買い物や、何かの外出などがない限り、家の中にいる。夕方、僕がこの辺りを通る時間帯は、人通りは皆無ではない。犬の散歩や、遊びに出た子供と手をつないだ母親などは少なくない。だがそれらも恒常的に通りを歩いているわけではない。いつかは通るが、いますぐではないのだ。

もし道で倒れた人間がいた場合。

その発見は早過ぎることもなければ、遅すぎることもない。例外はもちろんあるだろうが、この近辺で倒れたと考えれば一応筋は通る。

いつも通るその道を歩いていく。

至る所を探しながら、ゆっくりと歩いていく。

しかし。

「……やっぱり何もないか」

あつさりと自宅に辿り着いてしまう。

当然の話ではある。

貧血と疲労で倒れただけで、何かの事件に巻き込まれたわけではないのだから。

さて、どうしたものか。

今一番望んでいるのは、救急車を呼んでくれた人との邂逅なのだが。名前も連絡先も解らない以上、見つけようがない。

まあ、そうだな。

近くの家の人たちに話を聞こうか。

何も見なかったとしても、救急車が来たんだ、その騒ぎくらいは気づいているはずだった。

手始めに顔見知りの家へと向かう。

ピンポーン。

「はい。どちら様……って、司君。どうしたの？」

「こんにちは、おばさん。ちょっと聞きたいことがあります」

「良いけど……今日学校じゃないの？」

「あー……病院に行かなきゃならないので、昼から行くんですよ」
適当に誤魔化す。

が、おばさんの顔から不審の色は消えない。なので続ける。

「昨日の夕方、救急車が来たの知ってます？」

「ええ。うるさかったから……」

「あれ、運ばれたの僕なんですよ」

「え！？ そうだったの！？ だ、大丈夫？」

「はい。何でも貧血と疲労で倒れたらしくて。病院で点滴受けて帰りました」

「そうだったの……無事で良かったわね」

「はい、ありがとうございます。それで、聞きたいことがあるんですが」

「良いわよ。何かしら？」

「倒れていた僕を見つけて、救急車を呼んでくれた方がいるんですが、その人見かけたりはしませんでした？ お礼が言いたいのです探しているんですが」

「ああ……ごめんね。私も何事かと思って見に行っただけど、いたのは近所の人たちくらいで、誰も状況が良く解っていなかったみたいだから……」

通報したのは近所の人間ではないのか。

だとしたら通りすがりか？

救急車を呼んで、それが来たのを見届けてすぐに立ち去ったのか。あるいは通報してすぐに立ち去ったのか。

「救急車が来たのは何時頃でしたか？ あと、どこら辺に止まっていたか解ります？」

「六時近かったはずよ。吉井さん家の前辺りだったわ」

「そうですか……ありがとうございました。自分がどうなったか全然解っていなかったので、助かりました」

「気をつけてね。司君、お父さん達は海外だから今一人よね？ しっかり食べてる？」

「ええ。ご飯美味しいですよ」

「……おかずは食べてるの？」

「中華などを多々。麻婆が一番ですかね、やっぱり」

「それって……スーパーの総菜屋さんの？」

「あそこは大したもんです。安くて多くて美味い。消費者笑わせですね」

「笑わせ……そ、そうね。んー、やっぱり夕飯だけでも家で食べていったらどう？ 人数多い方が美味しいし、梨花も喜ぶし」

「いえいえ。ご厚意だけ有り難くちょうだいいたします。自分でもそろそろ料理でも始めなければと思っているところですし」

もちろん嘘だ。

いや、理想と呼んでおこう。

「そう……？ うちがちっとも迷惑じゃないから、いつでも言っ

「ちようだいね？」

「はい。ありがとうございます。では、そろそろ病院に行きますので、失礼します」

「またね。気をつけていくのよ」

頭を下げて歩き始める。

向かうのは病院ではない。

吉井さん家の前だ。

さつき通り過ぎた時は何も見つけれなかったが、もう一度見ておこうと思ったのだ。

三分ほどで到着。

もう少し頑張れば家に帰れていたのに、何とふがない。

まあ、意識を失ったのだから頑張るとかそう言う話ではないのだらうけど。

何も見つけれないまま、きよろきよろと道路を見回していると、背中から声をかけられた。

「家に何か用？」

振り返ると吉井のおばさんだった。

向こうもこっちに気づいたようで、開会していた表情が和らいだ。
「司君。どうかしたの？ 学校は？」

「ああ……実はですね……」

そりゃそうだよなと思いつつ、数分前にした話を繰り返した。

おばさんは得心いった風に何度も頷いた。

「私も通報した人は見てないわね。救急車って当たり前だけど、あつという間に来てあつという間に帰って行っちゃったから」

「そうですか……」

手がかりはつかめず。

しかしここで会話を切り上げるのも失礼かと思った僕は、慣れない世間話を始めることにした。

「おばさんはお変わりはありませんか？」

「ええ。うちは皆元気よ。ああでも、旦那は最近太り気味ね。メタ

ボよメタボ」

「ああ。普通に会社に通っていると、運動する時間なんてありませんものね」

「まあ平日はね？　でもあの人、土日もトドみたいにごろごろして時々蹴っ飛ばしてやりたくなるわ」

「お疲れなんですよ……ああ、裕也君は元気ですか？」

小学生の男の子だ。

今時の子供にしては珍しいほどに元気はつらつで、いつも外を走り回っている。時々暴走しておばさんに良く怒られているが、説教が終わればまた走り出すのが彼だった。ご近所では有名な腕白ボーイだったのだが、

「……裕也？　誰のことかしら？」

首を傾げられる。

また悪戯でもして怒られているのかと、苦笑いを返した。

「今度は何をしたんですか、裕也君」

僕の予想ではため息とか、怒りの声だとかが返ってくるはずだったのだが。

目の前の顔には不審の色しかなかった。

「だから誰のこと？　親戚にはそんな名前の人、いないけど？」

「え……？」

「あ。いけないいけない。そろそろ見たいドラマが始まっちゃうわ。それじゃ司君、気をつけてね」

「はい……」

呆然とその後ろ姿を見送る。

今のは冗談、なのか？

それにしても笑えない反応だった。

本当に知らないように見えた。

自分の子供を。

忘れてしまったような、そんな顔をしていた。

あの顔。

ひどく奇妙な感じがした。

意見が食い違ったからではない、ただ何となく、感覚的にそう思ったのだ。

虚ろに見えたわけではない。

薄く。

色が薄いように見えたのだ。

何だろう。

切り出された木の板を無理矢理組み合わせられて作られた、一本の大樹のようなイメージ。

ありのままのものに、人工的な着色が施されたような違和感。

それはあるいは、今の僕の状態と似たものが有るのかも知れなかった。

胸に手を当てる。

伝わってくる鼓動は力強く、疑いような確かさを持っている。

僕自体が歪んだわけじゃない。

こいつによって歪まされたわけじゃない。だけど。

決して認めて良いものではなかった。

第五話

ため息。

昨日と今日を合わせて何度目になるだろうか。

数は不明だが、一つだけ解ったことがある。

それは何も変わらないということだ。

息を吐こうが吸い込もうが、状況は一向に変わりはない。良くも悪くもならない。何をなさずとも、誰にでも出来るのがこれなのだから。

「……………」

また出そうになったそれを飲み込む。

気分を変えよう。

前を見ていた視線を上を転じる。

そして、色が降ってきた。

赤。

紅。

茜。

朱。

橙。

紫……。

数え切れないほどの色を抱く空。

定まらず、移り変わる彩り。

何を感じたわけでもない、ただそこに色があるというのを見つけただけ。

だがそれだけで憂鬱は吹き飛んだ。

水面になったような気分だ。

様々な光を溶かし込み、揺れて揺れて淡く踊る。

空は決して遠くなく、自分こそが空なのだと、そう悟った。視線をおろす。

前を見て歩き出せば、僕はいつもの僕だった。

速くもなく遅くもなく。

重くもなく軽くもなく。

家路を歩く。

途中で近所の人々と挨拶を交わしたり、塀の上に黒猫を見つけたりしながら、僕は探索を終えた。

自分ではない心臓。

これもきつと、いつかは僕の色に染まるだろう。 変わらない色はない。

空も絵も、人の心も。ずっとずっと変わり続けるのだ。

だから周りと違う色が一つあるうとも、それは別に心配する事ではない。

きつとまた、その色も別の色へと変わるだろうから。

ふう、と息を吐く。

それはため息ではない。

答えに辿り着いたときの、安堵の息だった。

× × × × ×

ふむ。

どうやら彼はあちら側ではないらしい。

何かに気づいたかとも思ったが、どうやら普通よりも勘が鋭いだけの、ただの人間だったようだ。

しかしどうするか。

記憶を弄ったとはいえ、接触者は観測を続ける義務があるのだが。まあそこら辺は猟犬たるこの身の仕事ではない。鈴の役回りは連中に任せることにして、私はさっさと元の仕事に戻るとするか。

ああ、釘を刺すのを忘れないようにしないと。

第三種と直接接触した人間を、連中はきつと強く欲しがらるだろうから。

せつかく助けられた唯一の命だ、モルモットのようにされては適わない。

全く因果な仕事だ。

だが一度やると決めた以上は、そう簡単に放り出せない。最後までできっちりやるとするさ。

何しろ私は猟犬。

つと、この姿じゃそれは激しく矛盾しているか。

ああ、いかん。

煮干しが食いたくなってきた。

第六話

鞆片手に席を立つと、直樹が声をかけてきた。

「司、俺これから相田達とゲーセン行くんだけど、お前も付き合わね？」

ゲーセン。

人が多い。

うるさい。

金を使う。

「お断りします」

「……そう言うと思ったけどよ。相変わらずはつきりしてんな、お前」

「ん？ 気に障ったなら謝るけど？」

「違うよーだ。気になんか障ってやらないもんねーだ。またあしたー」

小学生のような言い方で別れを告げられる。

ふむ。

僕にもああいう余裕が必要なのだろうか。

いや、どうだろう。

直樹化すると、絵美にバイオレンスな扱いを受けてしまいそうだし、直樹のように頑丈な男ならともかく、僕のような華奢な身体ではきつとあれは死を孕んだ行為だ。

メモントモリ。

深く頷き、教室を後にする。

と、廊下をしばらく歩いたところで、ここ数日部活に顔を出していないことに気づく。いくら休んでも何も言われないし、除籍もされないのだが、久しぶりに筆を握りたいのもあるので顔を出すことにする。

再び歩き出し、目的地へと向かう。

数分ほど足を動かせば、放課後だというのに冗談のように静かな廊下に着いた。

ここも相変わらずだと思いながら、教室の扉を開く。

「こんにちはー」

入りざまに挨拶を口にする。

するとイーゼルに向かっていた者の一人が、手を止めてこちらを向いた。

「はいこんにちは……っと、池上君か」

「池上司です、部長」

「大丈夫。他の誰を忘れても君のことは忘れないから」

「お、池上。久しぶりだなー」

「ホントだ。池君だ」

何だろ。みんな、まるで何ヶ月も顔を出さなかったような口ぶりだ。

五日ほどしか休んでいないんだけど。

苦笑いを浮かべていると、部長がうんうんと頷いた。

「君は地味な癖に、絵を描いている時は妙に存在感あるからね」

「そうですか？」

「ああ、そうだと。しかしほっとした。もう来ないのかと思ったぞ」

「本当だよー」

「そうですか？ 別に僕、ずっと毎日来てたわけじゃないでしょう？」

「いやいや。この前ほら、君の同期が一人止めたじゃない？ だから、よ」

「ああ。なるほど」

「部長。同期じゃなくて一年生って言いましょうよ。何でそうおっさん臭いんですか」

「黙れ眼鏡女」

「ちよ！ 何です、その言い方！ 大体私もうコンタクトですよ！

？　いくら同性だからって言って良いことと悪いことがあるでしょう！？」

「本当にまた来てくれて嬉しいよ、池上君。君がもし退部でもしたら、二年後には眼鏡が部長をやる羽目になったからね」

「ま、また！？　しかも何ですそれ、私には絶対部長をやらせないつもりですか！？」

「コンタクト、合っていないんじゃないの？」

「くそっ！　泣いてやる！　中島先輩、その大きな胸を貸してください！」

「え、ええ！？　きよ、今日はもう売り切れちゃったの……長谷川君お願い」

「加藤はほら、あっちの石像にでも抱きついてろよ。俺も前やってみたけど、結構冷たくて気持ちいいぜ？」

「うわあああああん！」

相変わらず激しい。

僕の美術部に対するイメージが、ここに入ってガラリと変わったのは誰もが納得してくれることだろう。个性的と言うか、毒のある人々ばかりで構成される部活。職員室から一番離れており、顧問の教師も滅多に來ないのの良いことに騒ぎ放題だ。彼らが相手では、僕程度の個性では地味と呼ばれても仕方なかった。

泣きながらファイティングポーズを取っている加藤さんの肩を叩く。

涙のにじむ瞳と目が合う。

「頑張つて」

出来るだけ優しく声をかける。
だが。

「……………」

ファイティングポーズが崩れ、だらんと腕が垂れ下がった。

「池上よ。お前は人を打ちのめすのが上手だな」

「え？　僕はただ、励ましの言葉をかけただけです」

「池上君。あのね、よく考えて欲しいんだけどね」

「何です、中島先輩」

「もし君がマーちゃんなら、その言葉をもらって嬉しいかな？」

「マーちゃんって、ひよつとして長谷川先輩の事ですか？」

「……違うぞ。俺じゃなくて、加藤だ加藤。加藤真希で、マーちゃんだ」

「なるほど。失礼しました中島先輩。続きをどうぞ」

「……ううん。やっぱり良いわ。私は、そうね……やっぱりイカロスにはなれないわ」

遠い目をして窓の外を見る中島先輩。

僕が何かしたんだろうか。

「ふふ。中島よ、池上君の中では加藤は既に、眼鏡女で固定されているのだ。それを見誤ったお前の負けだ」

「部長。勝ち負けの話じゃないと思うんですが」

「ほう？　なら長谷川に聞くが」

「何です？」

「君にとって加藤は眼鏡女か、それともマーちゃんか？」

はつとした顔をした長谷川先輩。眉間に皺を寄せて考え込んだ。が、すぐに顔を上げ、凜と言い放った。

「コンタクト女です。部長」

「……さすが、長谷川。縛られるよりも踏みたいと豪語しているだけの事はあるな。次の部長は長谷川、君に決まりだ」

「豪語した覚えはないんですが……それに次の部長は俺じゃなくて

……」

「またその話か。やれやれ、この時期、普通三年はもう引退しているんだがな……」

「推薦取れたからここにいるんでしょうが」

「はあ。仕方ない。中島、ちよつとこっちに来てくれ。三人で何回目かの話し合いだ」

「え、あ、はい。解りました」

「加藤と池上君は絵でも描いててくれ。ちょっと席を外すぞ」

「はい。いつてらっしゃい」

「……………あい」

「うむ」

教室から出て行く三人を見送る。

部長を決めるというのも中々に大変だ。部員が学年に二人ほどしかいないので、二者択一にならざるを得ないのだ。五人に一人とか、せめて三人に一人ならまだ良いのだが、二人だと選ばれなかった方にも選ばれた方にも微妙な感覚が残ってしまう。今の部長の場合は一人だったから、それはなかったらしいが。

と言うのを加藤さんが教えてくれた。

ああ、まずい。

加藤さんにフォローを入れておかないと。

振り返ると、真っ白に燃え尽きたボクサー風の姿がそこにあつた。投げ込むタオルを一瞬探し、ここが美術室であることを慌てて思い出した。

「あー、加藤さん」

「……………私は眼鏡女がマーちゃんかコンタクト女のどれかです。加藤ではありません」

「ええ？ ヒントがないと解らないんだけど」

「……………」

あ、失敗した。

つつい考えずに喋ってしまった。

少しは考えろよ、僕の頭。そんなんじや、五十歳を過ぎた頃には自分の名前すら思い出せなくなるぞ。

さあ、考えよう。

一度言ってしまった言葉は戻らない。

新しいものが必要だ。

元気づけるようなやつが良い。

……………良いんだけど、ちつとも出てこない。

そう言えば人を元気づけようとした事など、昼休みに教室でエロ本を読んでいた直樹が、それを間違えて次の授業の時に机に出して先生に見られてしまった時くらいしかない。

あれは大変だったなあ。

逆にハイテンションになってしまった直樹を元に戻すのは、結局僕には出来なかった。絵美の手刀に救われた。
違う違う。

あれは元気づけてないし、あの時思い知ったではないか。
他人の気分を意図的に変えるのは僕には無理だと。

……では、仕方ない。得意分野で責めよう。

「これは向日葵？」

加藤さんに描いていた絵を見つめる。

「……違う。タンポポ」

ふむ。

ふむ……ふむ。

なんだかちょっと緊張してきたぞ。

必死でその黄色いのを見つめる。

「そっか。キク科の植物はよく似てるよね」

「……そうね。レタスだってキク科だしね」

「へえ」

そうだったんだ。

とてもそう見えないけど、あの緑色もキク科の植物だったんだ。

凄いな、加藤さん。

よく知ってるなあ。

「何でタンポポを描こうと思ったの？」

「別に……ただ、何となく」

「そう。感覚は大事だよな」

駄目だ。

この路線はまずい。

中身だ、中身。僕の得意分野はそっちだろう。

「青空を背景にしてるけど、加藤さんの主題はタンポポ？ それとも景色全て？」

「一応、タンポポのつもり」

「じゃあ、もつと色を重ねないと。タンポポの花は黄色系だけじゃ駄目だよ」

「……え？ そうなの？」

「うん。一系統の色だけじゃ、あれほど鮮やかにはならないよ。目につく色と真逆の色を探した方が良い。見えにくいけど、確かにあるから」

「そうなんだ」

「でもこの辺りは凄く良いね。ちゃんと咲いてるって感じがする」

「ああ、そこ！ 結構時間かけたんだ。最初だったってのもあるけど」

「全てを濃くすると、逆に潰れちゃうからね。生き物には全て芯があるから、そこを強くして、後は柔らかく……」

色に対するイメージを口に行っているうちに、どうやら加藤さんの機嫌は直ったらしかった。

ほつと息を吐きながら、今度は逆に加藤さんの持つタンポポのイメージを聞き出していった。

描きたいものについて話すと言うのは、割と重要なことである。

如何にものを描くのが感性的なものとは言え、人間は感覚だけの生き物ではないのだから。線と色だけで表現するにしても、描くべき対象は二次元ではない。

目で見て、耳で聞き、鼻で匂い、手で触る。可能なら口に入れた方が良い。本当ならそうして得られた情報を心に焼き付け、一気に描き始めるのが理想なのだが、人間はそこまで記憶力が良くない。と言うよりも、対象もまた変化するのだ。

土の上でも自分の心の中でも。変わらないものなんてないのだ。だから描き始める時は、自分がかつて捉えたもののイメージを口に出し、再確認していく。

そうしてやっと、自分の中で像が結べるのだ。

生まれると言っても良いかもしれない。

「うん、うん。何となく見えてきたよ。ありがとう、池君」

「いやいや。僕は話を聞いただけだし」

「そんなことないよ。やっぱり自分の中にあるものでも、一回外に出さないと見えないもんなんだね」

「哲学みたいだね、それ」

「へへ。これでも元眼鏡ですから。そーゆーことも言うさ」

「頭良いイメージあるもんね、眼鏡かけた人。何でだろ」

「きつと眼鏡をかけない人の方が多かったからだよ。少数派に妙な理想を抱いたんじゃないかな？」

「おお。本当に頭良さそうだ」

「どんなもんよ！」

「んー、まあでも、加藤さんはコンタクト似合ってるね」

「え！？　そ、そうっすか！？」

「うん。良い感じ」

「っしやあ！　そういう言葉を待っていたんだ私は！」

念願のタイトルを手にしたボクサーのように、天高く拳を振り上げた。

やっぱりコンタクトが似合ってる。

もし眼鏡だったら、彼女の激しい動きはそれを振り落としてしまっているだろうから。

やっぱり活動的な人には眼鏡は危ないよね。

跳ね回る加藤さんを見てそう思いながら、僕は自分が絵を描く準備を始めた。

第七話

さて、どうしたものか。

見上げる空は黒く、そこから落ちる雨粒は太い。耳に入ってくるのは、それが大地に叩きつけられる音ばかり。

騒々しい。

昔から日本人は雨を美の一つと捉えてきたが、ここまで激しければ風流も何もあったものではない。平安時代の貴族であろうと、歌を詠む気にもなれないだろう。

現代人である僕はどうか。

「……濡れたくない」

それだけである。

だがその願いも叶わない。

簡単な話だ、今日は傘を持ってきていないからだ。

天気予報のお兄さんめ。

今日はあれだけ晴れると言ったじゃないか。

「……………」

はあ。

恨もうにも顔も名前も思い出せない。このままでは天気予報のお兄さん全てを呪わなければなくなる。それは何だかまずいので、ひとまず恨みは忘れることにした。

ああ。

みんなと一緒に帰れば良かった。

部活が終わった時は雨はちつとも降っていないかった。それこそお兄さんの言うとおりに、空は綺麗な夕焼けに染まっていた。久しぶりだからと、皆が帰宅した後も筆を振るっている間に、気づけば空は真っ黒。学校は既に人がなく、途中までも傘に入れてくれそうな者を探すのは不可能だった。

五分程か。

こうして空を見上げているが、ちつとも止む気配はない。風も強くないので、きつとしばらくはこのままに違いなかった。

「よし……」

覚悟を決める。

じつとしていても無駄なだけだ。若さとなけなしの体力を武器に、雨の中を走り抜けよう。

大丈夫だ。

きつと馬鹿は風邪引かない。

「……よし？」

ふむ。

良くはないが、考えると悲しくなりそうなので止めよう。今の僕に必要なのは絶望ではなく、己を顧みない勇気だった。

いや、まあ。

普通に欲しいのは傘なんだけどね。

「……さて。行くか」

頷き、下駄箱から一步飛び出した。

しかし。

「……あれ？」

冷たくない。

と言うか、濡れていない。

雨が止んだのかと思って顔を上に上げると、そこには水色の空があった。

いや。

それはただの傘だった。

「風邪引いちゃいますよ」

すぐ近くから声が聞こえる。

後方。

慌てて振り返れば、微笑みを浮かべた女子生徒が一人そこにいた。その手に傘の柄を握っている。

なるほど、僕の蛮行を見かねたらしい。

何とも心優しい人間だった。当然、礼を尽くさねばならない。

左手で右手の拳を包み、頭を下げる。

「有り難き幸せ」

「どういたしまして。でも、どうして中国風の礼法なんですか？」

「日本式だと膝から下がびっしり濡れますので」

「池上君の中の日本のお礼って、土下座だけなんですね……」

何やら複雑な目で見られる。

ひょっとして僕は、呆れられているのでも馬鹿にされているのでなく、実は哀れまれているんじゃないか……？

何てことだ。

またもや礼を尽くさねばならない。

しかし左手が右手の拳を包む前に、先ほどの会話の違和感を思い出す。

傘を持つ女子生徒を見つめる。

見覚えがない。

僕の浅い交友関係における女子生徒は、部活とクラスメートくらいしかない。目の前の彼女は、そのどちらにも含まれていなかった。

「失礼ですが、チー力はなぜ僕の名前をご存じなのですか？」

「チー力って……確かスペイン語でお嬢さんでしたよね……えっと、以前全校集会で表彰されてるのを見たからですが。ほら、九月の最初。絵画コンクールの賞状を貰っていたじゃないですか」

「ああ。そんなこともありましたね」

何を書いたんだったか。

良く覚えていないが、確かに賞状はもらった。

しかし全然いらなかったので、部室に飾りたいと言った部長にあげた。今は美術室のどこかに画鋏で押してあるはずだけだ。

「あ、ごめんなさい。私は二年三組の笹川梓です」

丁寧に頭を下げられる。

ふむ。

日本人らしい、しとやかなお辞儀である。

僕にはとうてい真似できないと思いつながら、左の拳を胸に当てる。

「これはどうも。僕は二年……二組の池上司です」

「今、迷いませんでしたか。自分のクラス」

「まさか。間髪入れずに答えましたよ、僕は。何なら法廷で証言しましょうか？　僕は二年……二組だと」

「また迷った……それは法廷では命取りになるんじゃないですか？」

「射殺ですか」

「軍事法廷だつてんですね、そこ」

「戦争は嫌いです」

「私ですよ」

意気投合した。

「あの、それより」

「何ですか、佐川さん」

「違います佐川です。お話は帰りながらにしませんか？　身体が冷えちゃいますし」

「ああ、これは失礼しました。では……」

気配りか。

自分には色々足りないものがあるらしいと嘆きながら、すいつと身体をずらす。しかし思いの外強い力で腕を捕まれ、それは未遂に終わる。

「ちょ、ちょっと。どこに行くんですか？　濡れるじゃないですか」

「傘は一つ。人間は二人。一人はあぶれる。解りますか、さ……さん」

「笹川です。その可哀想な者を見るような目をやめてください。二人で入れば良いじゃないですか」

「それは世に言うあれですか」

「あ……え、ええっと」

「ソウゴウガサ」

「何ですかその毒キノコっぽい名前。ちつとも甘酸っぱくないじゃ

ないですか」

「ソウゴウガサストロベリー」

「あ、甘酸っぱい……わけないでしょう！ 相合い傘です、相合い傘——う」

力強く主張したかと思えば、突然顔を赤くして下を向いてしまった。

ふむ。

「照れてるんですか、フロイライン」

「……どうぞ傘を差し上げます。お気をつけてお帰りください。では」

傘の柄を押しつけ、雨の中に飛び出そうとするその腕を慌てて掴む。

「ごめんなさい。僕が馬鹿でした。そして今も馬鹿です。これから馬鹿だと思えます。許してください」

「……何でしょうね。謝られているはずなのに、私が鬼畜のような人間に思われる発言です、それ」

「どういたしまして」

「……はあ」

盛大なため息をつかれる。

何かまた失敗したかと戦々恐々としていると、行きましようと呼びかけられ、結局僕たちは歩き始めた。

相合い傘。

もつと甘酸っぱいものだったはずだ。

こんな。

こんな、倦怠期の夫婦のような空気を漂わせるものではなかったはずだ。

まあ、倦怠期の夫婦にあったことはないんだけど。

「大丈夫ですか？ 肩は濡れてませんか？」

「はい。僕、時々女の子と間違われるくらい華奢なんで」

「……それはひょっとして、身長が百六十後半もある私に対する当

てつけですか」

「いやいや。ひょっとして気にしていらっしゃる?」

「それはそうでしょう。例えばほら、池上君くらいの男の子と並ぶと私の方が勝っちゃうし」

「僕は割と小さい方だからなあ。普通は同じくらいか、相手の方が高いんじゃないの?」

「かも知れませんが。でもやっぱり、背の高い女は嫌煙されがちなんです。男の人って、小さい女の子が好きみたいだし」

「なんだっけ、ロリコン? 僕には良く解らないなあ」

「身長の話をしてましたよね!」

「ああ、そうだったそうだった」

「大丈夫ですか……色々と」

「諦めてるよ」

「頑張ってください」

「きつと他の誰かがやってくれるさ」

「あなたの中身を誰がどう弄ると言っんですか!」

「はは、笹川さんは元気だなあ」

「言っておきますけど私、普段はこんな感じじゃありませんからね。ボケまくるあなたのせいですからね」

「何を言ってるんだ。僕はツツコミだよ」

「それが既にボケだと言ってるんです……」

雨音が強いため、この距離でも簡単に声がかき消されてしまう。だからほとんど怒鳴り合うようにしながら、僕たちは会話をを行う。なるほど。

遠目に見ればお笑いコンビにも見えるだろう。

「しかし笹川さん優しいよね」

「何がですか?」

「初対面の男を傘に入れるところとか」

「でも、名前と顔は知ってましたし。あと、絵とかも」

「へえ。僕はいつの間にか絵になってたんだ」

「違うでしょう。普通に池上君が描いた絵って事ですよ」

「ああ、そうか。美術室で？」

「はい。職員室の前も。凄いですよね。私あれを見たときは本当に感動しちゃいましたよ」

「そうなの？」

「ええ、それはもう。飲み込まれるような感覚でした。絵のはずなのに、中の景色が動いているような気さえしました」

「はあ。凄い感性だね」

「凄いのはあなたの方でしょう？ ひょっとして照れてるんですか？」

「まさか。興味がないだけだよ」

「……自分が描いた絵に、ですか？」

「うん。描くのは好きだけど、描いてしまったものはどうでも良いんだよね」

「ああ……だから賞賛にも感想にも興味ないんですね、あなたは」
ふと。

笹川さんの気配が消えた気がして隣を見れば、しかしそこには変わらずに歩くその姿があった。

前を向いていた顔がこちらを向く。

その瞳は、果たして何色だったのだろうか。

「——ひょっとして、自分にも興味なかったりします？」

「まあね」

黒いが、それだけではない。

青も赤も黄色も紫も。

覗き込めば様々な色が見える。

「ふふ。池上君らしいですね。でもそんな池上君だからこそ、あんな絵が描けるんでしょうね」

「良く解らないよ」

「まあ、そうですね」

無邪気に笑う。

きらきらと輝くその瞳は、まるで回転する万華鏡のように捉えようがなかった。

「あ、私電車通学なのでここまでです」

言われて辺りを見回せば駅の前まで来ていた。

珍しいことだ。

自分がどこにいるか解らなくなるなんて。

ああそうだと。

握っていた傘の柄を差し出す。

「そっか。はい、傘をどうも有り難うございました」

「明日まで貸しといてあげます。どうせ私、駅に着いたら車で迎えに来てもらいますから、傘は必要ないんですよ」

「いや、でも」

悪いから返すよ——と、そう続けようとしたのだが。

ばしゃばしゃと。

笹川さんは一瞬で傘から出て、あっという間に駅のホームまで走って行ってしまった。

こちらを振り返り、手を振った。

「また明日ねー！」

それだけ告げた後、踵を返して姿を消してしまった。

一瞬の早業。

こちらに手を振り返す暇さえ与えない。

呆気にとられながら、ざあざあと響く雨音を聞き続けた。

吐息を一つ。

「帰るとするか」

やれやれと首を振り、僕は歩き始めた。

騒々しい雨音をBGMに、ただ一人家路を急ぐ。

相変わらず歌の一つも詠む気にもなからかったが、それでもまあ、鼻歌くらいは歌えそうだった。

中々のものだ。

この空。

僕だけの空。

この美しい、水色の空は。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1540i/>

Outsiders

2010年10月14日16時54分発行